慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第87回 北里記念式挙行

北里賞　本田賢也
（慶應義塾大学医学部微生物学・免疫学　教授）
「免疫系に深く影響を与える腸内細菌株の同定とその臨床応用に関する研究」

北島賞　小﨑　健次郎
（慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター　教授）
「臨床遺伝学の医療実装と慶應義塾大学病院からの新規２疾患の発見」

今年度の受賞者の集合写真（上段左から、金井医学部長補佐、武田三四会長、竹内常任理事、天谷医学部長、北川病院長、河上医学部長補佐、下段左から、北里氏、本田氏、小﨑氏、長谷山塾長）

第87回北里記念式が6月12日午後1時から北里講堂で行われた。この式は初代医学部長・北里柴三郎先生の命日に際して行われる。優れた研究実績を称えて、基礎系に北里賞、臨床系に北島賞がそれぞれ授与される。

昭和26年に北里先生の偉業を記念して北里賞が始まり、昭和33年に第二代医学部長・北島多一先生を記念した北島賞が加わった。今年度、北里賞に1名、北島賞に1名が選出された。

北里賞受賞の本田氏は、ヒトの腸に住み着く約1000種類の腸内細菌と免疫細胞との関係に注目し、腸内細菌を無菌マウスに導入することによって免疫細胞に深く関わる腸内細菌をスクリーニングして同定している。また、この同定した腸内細菌を制御することで、腸内細菌の構成異常が原因である難治性疾患の治療に応用している。

北島賞の小﨑氏は、血小板が大きく、そして数が少なく四肢が太い患者の原因がCDC42遺伝子の異常であると同定し、身長が伸び切って骨格筋異常が認められる2つの症例の原因遺伝子を同定するなど、未知の疾患の原因を同定している。

式典は、北里先生への黙祷から始まり、厳かな空気に包まれた。2名の受賞者を称えて、長谷山彰塾長、天谷雅行医学部長、武田純三三四会長、北里一郎氏が挨拶された。

長谷山塾長は、北里先生の御命日にこのような式が行われることは素晴らしいと述べ、「贈医」にも見られる福澤先生の実学精神が受け継がれていくことを期待したいと述べた。

天谷医学部長は、北里賞と北島賞の授与の伝統が引き継がれていくことは素晴らしいと述べ、この度設立された新病棟で提供される医療のテーマの根本には北里先生の理念が脈々と流れていると語った。

武田三四会長は、北里先生の「基礎医学と臨床医学の連繋を緊密にし、学力は融合して一家族の如く」という言葉を目指していきたいと述べた。また、学内だけでなく他大・産業医等との連携を進めていきたいと語った。

北里一郎氏は、北里先生の「報恩の精神」により本塾医学部が設立されたことを語った。また、今回受賞された2氏は基礎・臨床の両方で成果を上げており、北里賞・北島賞に相応しいと述べた。

式には、長谷山彰塾長、竹内勤常任理事、天谷雅行医学部長、北川雄光病院長、河上裕医学部長補佐、金井隆典医学部長補佐、武田純三三四会長、そして北里一郎氏が出席された。北里研究所からは小林弘祐理事長、川瀬惠史常任理事、小瀧徹常任理事、北里英郎理事、北里大学の馬嶋正隆副学長が出席し、受賞を祝った。

華々しい授賞式と記念撮影ののち、受賞者2氏の15分間の講演が行われた。講堂に詰め掛けた多くの聴衆からの祝福の拍手に包まれ、無事閉式となった。

（2年　諏訪弘治）

平成30年度 三四会評議員会報告

去る6月16日（土）信濃町キャンパス2号館11階大会議室で平成30年度定例評議員会が開催された。

山上淳理事（77回）による発声に引き続き塾歌を斉唱した。長倉和彦議長による「開会宣言に続き、平成29年度物故会員98名に対し黙祷が捧げられた。最初に武田純三会長（52回）より挨拶が行われた。冒頭で新病院棟の竣工式が盛大に執り行われ、5月7日より無事開院したことが報告され、新病院棟建築募金への三四会員への謝意が述べられた。

第1号議案である平成29年度事業報告が古梶清和副会長（63回）により行われ、ほぼ前年通りに各種事業が行われたと報告された。また三四会ホームページに各支部会の様子を載せたいので写真などを寄せてほしいとの要請があった。医師会で会長、副会長、理事、監事などを務める三四会員の調整を行い相互のネットワーク作りを進めたいとの取り組みが紹介された。産業医委員会の山澤文裕理事（60回）より三四会員の産業医の連携をほかり、慶應医師会など塾内との連携を深めてゆきたいと報告された。

第2号議案である平成29年度会計決算が渡辺真純副会長（64回）より上程され、収入・支出ともほぼ例年通りであったと報告された。

第3号議案である財産目録、会計事務処理並びに財産管理監査報告が松本純夫監事（52回）より行われ、会計及び会計以外の業務が適正に行われたと報告された。

第4号議案である募金活動報告が末岡浩理事（59回）により行われた。現在の募金額は26億4000万円に達したことが報告され三四会員、関連企業への感謝の意が表された。

第5号議案である平成30年度の事業計画が リー啓子副会長（60回）より提案され、今年度も連合三田会で医学部講演会・赤倉山荘模擬店・ブラックジャックセミナーを行うこと、医学部新聞については平成30年4月1日より編集委員長が10年以上務められた坪田一男理事（59）より門川俊明理事（70）に引き継がれ、門川編集委員長より今後は学外の三四会員の情報を積極的に取り上げたいとの抱負が語られた。

第6号議案である平成30年予算が渡辺真純副会長（64回）により上程され、収入・支出ともに例年通りの計上している旨が述べられた。

第1～6号議案は全て承認された。続いて、天谷医学長（64回）より医学部・病院報告が行われた。長年の悲願であった新病棟が無事開院し今後は最新の技術と広々としたスペースで最先端の医療を提供可能となったことへの感謝が述べられた。医学部では97回生の現役生の国家試験合格率が100％であったこと、白衣式の模様、海外での臨床研修の状況について報告された。また、今後医学部、理工学部、薬学部、看護医療学部が連携し研究を展開し、人材育成に務めてゆく構想、厚生労働省の三四会員との懇親会について述べられた。武田会長より高額寄付者へ感謝状が贈呈され、全体写真撮影が行われた。

続いて三四会奨励賞の選考結果が古梶副会長より報告され、武田純会長より嶋晴子君（小児科学教室）、高橋祐介君（外科学（呼吸器）教室）、田中伸之君（泌尿科学教室）、杉本真也（内科学（消化器）教室）、清野隆（内科学（消化器）教室）、安西惇君（内科学（循環器）教室）、川野義長君（内科学（腎臓・内分泌・代謝）教室）の7名の受賞者への授賞式が執り行われた。今年度は社会功労賞の応募はなかった。

最後に星野健副議長（63回）から参加者への謝意が述べられ閉会となった。閉会後、ザパークで情報交換会が催され、ラストは応援指導部OBの山上淳理事（77回）の指揮の下、参加者全員で「若き血」を歌い散会となった。

（理事　長谷川直樹　64回）

今年度の三四会奨励賞受賞者たち

平成30年度三四会奨励賞受賞者

基礎分野

嶋　晴子（小児科　児82相当）
「ヒストンユビキチン化酵素Ring1A/BはGis2の発現を抑制して急性骨髄性白血病幹細胞を維持する」

高橋　祐介（呼吸器外科　外82回）
「肺切除術後の肺再生のメカニズムの解明と臨床応用の探索」

田中　伸之（泌尿器科　泌82回）
「腫瘍内不均一性を可視化する3次元イメージングプラットフォームの確立」

杉本　真也（消化器内科　内88回）
「ヒト正常大腸幹細胞の同所異種移植技術の確立」

清野　隆史（消化器内科　内87回）
「ヒト由来膵腫瘍オルガノイドにより明らかとなった幹細胞ニッチ因子非依存性の獲得に伴う膵がんの悪性化」

安西　淳（循環器内科　内84回）
「心筋梗塞後心不全に対する新規治療標的の同定」

川野　義長（コロンビア大学メディカルセンター　内86回）
「腸管免疫を介した新規インスリン抵抗性制御機構の解明」

JKiC産学連携の取り組み

高度な素材と化学製品開発を促進するJSRグループの化学研究者と慶應医学部の研究者・医師による産学共同研究拠点「JSR・慶應義塾大学医学化学イノベーションセンター（JKiC）」の取り組みを紹介します。

産学医連携部門
産学医連携部門長　佐谷　秀行（60相当）
産学医連携コーディネーター　孤嶋慎一郎（71相当）

JKiC産学医連携部門のミッションは、研究開発部門と協力して、JKiCの発展に資する研究創出、事業創出、イノベーション創出活動を行うことです。具体的には、JKiCでは、研究創出活動として4つの領域の戦略プロジェクトが稼働していますが（本連載第1回～第4回に記載）、それらの研究成果を学術的な成果として終わらせず、新しい事業創出へと離陸させるための管制塔となるのが産学医連携部門です。

本部門は、JSRと慶應からそれぞれ2人の部門長、2人の産学医連携コーディネーター、加えて4名の支援人材の総勢8人で構成され、各種会議開催、契約締結支援、広報活動、イベント開催などの運営・事務業務を行うことで、『産』と『学医』を円滑に連携させ、win―winの結果を得るための活動を行っています。本部門では、研究開発の進捗を事業化の視点から毎年評価する仕組みの導入を計画しています。また、研究テーマの健全な新陳代謝を推進する制度の検討にも着手しました。企業との共同研究開発は、知的財産、契約、利益相反、さらに臨床研究を行う場合は同意取得や個人情報保護への配慮と対応が必要です。学内の専門家と協力し、これら連携に伴う種々の問題を、効率的に処理することもJKiC産学医連携部門の重要な仕事です。更に、JKiCの研究創出活動は4つの戦略プロジェクトに限定されません。研究開発部門とともに、早期の研究テーマに研究費を支援し、シーズを育成する学術開発プロジェクトという制度も設け、毎年新規の研究課題を募集しています。

産学医連携部門では、研究の紹介に留まらず、イノベーション創出を目的とした様々なセミナー・勉強会・講習会も企画、実施しています。例えば、2017年度は、幾つかの省庁の方々に国の政策についての講演をお願いしました。また、JKiCには生体イメージングシステムなど最先端機器が導入されており、それらを広く慶應の研究者が使用できるよう講習会も開催しています。

産学医連携部門では、JKiC棟のスペースをどのようにすれば有効に活用できるかについても検討を行っています。既に、多くの学生や研究者や医療関係者がJKiC棟1階のオープンスペースをグループ学習やディスカッションに利用しています。その他に、セミナーや講習会目的での会議室利用も産学医連携部門で受け付けています。1階の展示スペースのディスプレイも含め様々な情報を発信することにより、バックグラウンドの異なる人々が交流し、イノベーションを創出する場として活用できるよう、さらに工夫を続けたいと思っています。

JKiC棟１階のオープンスペース。写真右側は会議室

第115回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー
「がんゲノム医療の夜明け前」開催

病院長　北川　雄光（65回）

平成30年6月9日 第115回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー「がんゲノム医療の夜明け前」が開催され、171名の皆様にご参加頂きました。

現在、がん治療は発生臓器ごとに様々な治療法に関する臨床試験が行われ、それらの結果に基づいて標準治療が策定されています。一方、がんの発生や進展は遺伝子の変異の蓄積が原因であり、こうした遺伝子の異常を指標にした個別化治療すなわち「がんゲノム医療」が世界的にも注目されています。本邦においても国を挙げてこれを推進する運びとなり本年2月にはで当院が、厚生労働大臣から「がんゲノム医療中核拠点病院」に認定されました。当院は認定された全国11病院のうち唯一の私立大学病院であり、新しい時代のがん医療を先導する上で大きな一歩となりました。そこで、今回の生涯教育研修セミナーではいよいよ本格的に稼働し始めるがんゲノム医療を取り上げ、この領域で日本を代表する3名の講師の皆様にご講演を頂きました。

本学臨床遺伝学センター教授である小崎健次郎氏は、難病・遺伝性疾患ゲノム医療のリーダーであり、網羅的な遺伝子解析を用いて遺伝子異常に起因する希少な疾患を発見し、治療法の開発に繋げる未診断疾患イニシアチブを世界的に展開してきた実績を紹介して下さいました。こうした基盤整備が遺伝性腫瘍の発見や広くがんゲノム医療の展開に繋がることを示され、ゲノム医療の社会実装は基礎・臨床の連携が重要であり、まさに本学初代医学部長北里柴三郎先生の建学の精神が重要であることを強調されました。

本学腫瘍センターゲノム医療ユニット特任教授西原広史氏は、本学ゲノム医療推進の実務担当者として前任地でのゲノム医療立ち上げの経験から、がん遺伝子パネル検査システムを分かりやすく解説してくださいました。また、現在本学が実施しているPleaSSion検査やその実施体制を紹介し、本学が24の連携病院と共にがんゲノム医療の普及、均てん化を目指して活動する計画を語って頂きました。

最後に国立がん研究センター研究所所長であり、本年6月に発足したがんゲノム情報管理センターの所長を兼務する間野博行氏が、日本のがんゲノム医療の今後の展望について講演されました。間野氏は一部の肺がんにおけるドライバー遺伝子変異を同定し、これを標的とした分子標的治療が劇的に奏効することを世界に向けて示したご経験から、がんゲノム医療の重要性、可能性について熱心な解説をして下さいました。

今回「夜明け前」と題しましたように、日本の「がんゲノム医療」は世界水準に遅れを取っているのが実状です。本学では関連病院との連携体制を強化し、日本最大のがんゲノムネットワークの構築し、日本のがんゲノム医療均てん化において先導的な役割を果たして参る所存です。今回のセミナーはこうした本学の姿勢についても皆様にご理解を頂き、今後のご支援をいただく良い機会ともなりました。本セミナー開催にご尽力を頂きました関係者すべての皆様に心より御礼を申し上げます。

平成30年度　第１回定時理事会報告

日時：平成30年５月18日（金）午後７時～

報告事項

1．産業医委員会より医学部・病院・三四会が連携して産業医に対する支援を組織的に行う計画、並びに慶應医師会との連携につき報告された。
2．医師ワークライフ支援委員会主催の第11回先輩医師と語る会を６月８日に開催予定。
3．医学部新聞編集長が４月１日より坪田一男理事より門川俊明理事に交代とともに、編集委員も新規交代した。今後学外情報も多く伝えていく方針。
4．本年の慶應赤倉アカデミー（ＫＡＡ）は10月13～14日に開催決定。講師は門川俊明先生。
本年の連合三田会大会は10月21日（日）に開催される。今年も医学部講演会を予定し、講師は北里研究所病院糖尿病治療センター長山田悟先生の予定。
5．2019年春の叙勲受章者は１名で、瑞宝双光章を野崎正之先生（児39）が受章された。
6．北里賞・北島賞の受賞予定者２名が報告された。北里賞：本田賢也先生（微73相当）、北島賞：小嵜健次郎先生（児68）
7．葛西健氏（69）が西太平洋地域事務局長選挙の正式な立候補者に決定。６月８日に葛西健氏を励ます会（仮称）が予定されている。
8．新病院棟建設募金状況について、および、今後信濃町キャンパス整備資金として募金が継続していること、銘板対象者に慎重に確認作業が行われることが報告された。

審議事項

1．６月16日の定例評議員会に議事として提出される平成29年度決算・平成30年度予算案が承認された。
2．三四会奨励賞の候補者７名が承認された。（敬称略）嶋 晴子（児82相当）、高橋 祐介（外82回）、田中 伸之（泌82回）、杉本 真也（内88回）、清野 隆史（内87回）、安西 淳（内84回）、川野 義長（内86回）

慶應義塾大学病院　各種お問い合わせ先
・初診予約（午前９時～午後７時、第２・４・５土曜日は午後５時まで）
三四会ホットライン
TEL 03-3353-3034（ミオサンシ）
医療機関用
TEL 03-3353-1257　FAX 03-5843-6167
WEB「病院ホームページ」→「お問い合わせ一覧」→「医療機関の方へ」→WEB申し込み：初診外来予約フォーム（24時間申込）→医療機関からの初診予約申込フォーム
・検査予約（午前８時30分～午後５時）
PET/CT…TEL 03-5843-6165
SPECT …TEL 03-5843-7071
・予防医療センター：人間ドック（午前８時30分～午後５時）
TEL 03-6910-3533

鑑賞知来

恐れ入谷の鬼子母神は有名だが、びっくり下谷の広徳寺はご存知だろうか。下谷は台東区の西側を占める江戸時代以前からの地名で、商人の町として江戸文化の中心であったそうである。私は8年前から縁あって下谷医師会の一員となったが、通勤の地下鉄で乱読する文庫本のうち、時代物が格段に面白く感じることに最近気付いた。

病院の前に車坂通りという変哲もない道がある。藤沢周平さんの作品で、妙齢の小唄の師匠さんが一人で暮らす仕舞屋が車坂にあった。これだけのことでいらぬ想像が一気に膨らむ。彰義隊に加わろうと下谷の長屋から飛び出した若者もいた。上野の山まで走れば数分であろう。家で大砲の轟きを聞く母親にも同情し、早く逃げ帰るよう念じてしまった。

永寿の分院がある柳橋も、景気のいい札差らが芸者衆と遊ぶ料理屋や船宿のある町として頻繁に描かれる。宇江佐真理さんの「髪結い伊三次捕物余話」では、伊三次の女房で深川芸者のお文がこの町の風情もよく伝えてくれる。柳橋から吉原に繰り出す際は、細長くて滅法速い猪牙舟（ちょきぶね）を雇って大川を猛進したらしい。なる程、これなら15分で着くし気合も入ろう。吉原大門の手前には区立台東病院があり度々訪問する。「みをつくし料理帖」のあさひ太夫らを思い浮かべ、往時を偲んで辺りを散策したいのだが、知り合いに見られると妙な噂が立ちそうで実行できない。

医療の話題もひとつ。医療安全の一環で、手術当日に左右どちらの鼠径ヘルニアか患者さんに申告して頂く。回診時に1回目、手術室への申し送りで2回目、外回りナースから3回目。ある男性患者さん、3回目で怒り出し、「おんなじ事何度も何度も聞きやがって、いい加減にしちくんな！」。これを聞いて、「本所おけら長屋」の短気だが情に厚い万造と松吉を思い出した。江戸っ子に合わせた対応が必要かもしれない。

（永寿総合病院副院長、医療安全室長　愛甲　聡　65回）